



禍い転じて

丸山台小学校 副校長 野村 光

日頃より、新型コロナウイルス感染症拡大防止のための取組を始めとして、学校への様々なご協力に感謝いたします。早いもので二月に入りました。二月は「如月(きさらぎ)」とも呼びます。寒さで着物を「更に重ねて着る」ことからこのように呼ばれるという説があるようです。

丁度一年前の今頃は、横浜港のクルーズ船で発生した新型コロナウイルス感染症のニュースが毎日のように報道され、テレビ画面に映し出される大きな白い船の外観と、耳慣れない言葉を聞きながら目に見えない新しいウイルス感染症に不安を覚えました。しかし、船の中という隔離された別の世界での話を聞くような感覚もあったように思い出されます。そして、その後、学校は長い休校に入り、初めの緊急事態宣言が発令されました。学校から子どもたちの姿が消え、夏の学年花壇に咲くはずのヒマワリやアサガオも咲かないままの静かな夏が過ぎました。「学校の新しい生活様式」が始まり身の回りのことが急激に一変しました。マスクの着用やソーシャルディスタンス、外出の自粛等も生活の一部となりました。ZOOMでのリモート会議やYouTubeでの情報発信など、学校のICT環境も一気に進んでいます。しかし、残念ながら感染症の収束の兆しが見えないまま、やがて二度目の春を迎えることとなります。

「コロナ禍」という言葉を頻繁に耳にします。「コロナ感染症という災難」ということですが、今、私たちはこの「禍(わざわい)」の只中にいます。一方で「災い(禍い)転じて福となす」ということわざがあります。この由来は、中国の説話集「戦国策(せんごくさく)」や歴史書である「史記(しき)」に出てくる四字熟語「転禍為福」にあるそうです。「転禍為福」は「てんかいふく」と読み、マイナスなものをプラスにするという意味で「禍を転じて福と為す」とも表記し、ここから「災い転じて福となす」になったと言われています。学校ICT環境の急激な発展もコロナ禍におけるプラスのはたらきだと考えると前向きな気持ちになります。

学校は感染症拡大防止の取組を行いながら教育活動を続けております。昨年10月、6年生の有志や美化委員会の児童を中心に、学校花壇に菜の花の種蒔きとチューリップの球根植えを行いました。寂しい花壇の表面をよく観察すると、土と同じ色をした小さなチューリップの幼芽を見つけることができました。その頭上を見あげると、まる裸だと思っていた桜の木の枝先にも、ふっくらとした新芽が育っていることにも気づきます。寒い冬の間も植物たちは、成長を止めてはいません。次に必ず来る穏やかな春の日に、満開の花を咲かせるための準備を今から着々と始めているのです。

二月の別名を「生更木(きさらぎ)」、つまり「草が生え始める月」という言い方をしている説もあるようです。極寒の中、新たなスタートの準備が静かに確実に始まっている…そんな時季が、「今」なのだと思えます。

